

## 北海道地理学会小史

### はじめに

北海道地理学会が創立されたのは、第1回総会が開催された1950年12月7日であるから、今年（2001年）で51年目、ちょうど半世紀を経過した。昨年は創立50周年で、記念事業の一つとして11月11日、記念シンポジウム大会が開催された。もう一つの事業が会誌75号に「創立五十周年記念号」として記念シンポジウムの内容、北海道地理学会誌総索引とともに、北海道地理学会小史を掲載することであった。

まさに半世紀にわたる北海道地理学会の歴史を概略だけでもまとめることは、事務局の仕事に携わってから23年になる筆者はその歴史の半分に満たず、前半の27年の時期は直接知らず、多くの先達会員がおられる中で荷が重いことである。しかし、事務局には学会誌が保存されており、中には古い号で欠くものがあるが、幸い学会創立時の発起人13人の一人で、元会長の沼田武先生から会誌No.1からNo.35までご提供いただいたので、学会誌をひもとき、不明な点は当時の状況を先達会員にお聞きすることで、北海道地理学会の活動、掲載物、行事、会員の状況などについて変遷を辿ってみることにする。

なお、北海道地理学会の創立時の様子を発起人の一人であられた柏村一郎元会長と沼田先生にインタビューでお聞きすることができたので、小史関係の記事として別に掲げた。創立当時の頃の熱気が感じられる。また、北海道地理学会元会長の先生方には、インタビューの先生以外に、在任されていた頃のエピソードや最近の学会活動に対してのご助言があれば、ということでご執筆をお願いしたところ、4つのご寄稿があり、これらも別に掲載させていただいた。併せて読んでいただきたい。また、以後の記述では当時の三役（会長、副会長）以外、本会会員の敬称は略させていただいた。

### 1. 北海道地理学会創立のこころ

この時期は、北海道地理学会の現在の組織や性格と活動に受け継がれている面があるので、少し詳しく記すこととする。

#### (1) 学会創立の経緯

1950年の学会創立の時期は戦後の食糧難から脱し切れておらず、また新制大学発足直後であり、地方地理学会設立としては早い方であった。因みに東北地理学会（仙台）は1947年、地理科学学会（広島）が1961年である。「学会創立のいきさつ」を会誌No.1（1951年発行）から掲げてみよう。

#### 北海道地理学会ができるまでのいきさつ

1. 戦前からの札幌地理研究会<sup>1)</sup>員は、戦後復活してより大きな歩みを進めたく望んでいた。
2. 戦後各地に地理学会が、はなばなし活動をはじめたので本道でも同志の会をつくりたいという声が高まって来た。
3. 1950年4月、地理委員会が各地方の地理篤学者に地理調査を依頼され、その北海道地方の調査員が仕事をはじめから、「北海道地理学会」をつくる話が急に進行した。
4. 1950年6月、井黒弥太郎（札幌北辰中）、伊藤恵（学芸大附小）、柏村一郎（札幌北高）、亀谷栄（学芸大函館）、小林茂（学芸大附中）、沢田準一（札幌山鼻小）、田中秀作（学芸大旭川）、棚瀬善一（帯広柏葉高）、奈良部理（札幌西高）、沼田武（苫小牧東中）、宮崎芳男（道教研）、森寿美衛（学芸大札幌）、山崎長吉（道教研）の13名が発起して会の組織に着手した。しかし、会員を集めるために、あまり積極的な手段はとらなかった。
5. 1950年12月 文部事務官理学博士保柳睦美氏来道を機に、発会の意味の第1回総会を開いた。

柏村元会長へのインタビューによると、上の「いきさつ」にみる地理委員会は、当時の文部省が戦後の北海道の地域開発の研究や地理教育に資するため設けた委員会で、まとめの仕事を地域開発研究では中野尊正博士（当時国土地理院、のちに東京都立大学）が当たり、北海道調査の「地方の地理篤学者」

として森寿美衛が選ばれ、柏村一郎、奈良部理、宮崎芳男、沼田武、井黒弥太郎、なども一緒に調査に当たったとのことである。また、この委員会で地理教育を担当されたのが保柳睦美博士（のちに東京教育大学）であった。

学会組織で人脈のような話は適当でないが、人脈からみると、保柳博士、中野尊正博士、森、柏村、沼田を始め、発起人の何人かは旧東京文理大系（のち旧東京教育大、現筑波大）にあり、互いに連絡しあい調査に当たったと思う。柏村元会長へのインタビューにあるように、中野博士、保柳博士から「北海道はこれから開発で重要な時期を迎える。そのためには地理研究をする組織が必要で、キチンとした学会を組織したら」というアドバイスがあり、学会創立の発端になったという。お二人の有名な先生が本会創立に関係があったことになる。

戦前からの「札幌地理研究会」<sup>1)</sup>については、インタビューでも詳しい組織は不明であったが、旧制中学校、小学校の地理の先生方が会員の中心で、これに大学（北大、師範学校など）の先生が関わっていたようである。この会は戦時中活動停止を余儀なくされ、戦後の混乱期を経て活動再開を模索していたころ、北海道地理学会が創立されることになり、本会に参加することになって解散となつたようである。しかし、北海道地理学会設立の会員組織に当っては「学会である以上、これまでの経緯にこだわらず、新しく横断的に組織する」との方針で、1950年6月の発起人呼びかけから12月の第1回総会の半年間に各方面に当たり、59名の会員でスタートした。会員には、高校・中学校・小学校の先生が39人と6割強、大学人として発起人のほか、佐々保雄（北大・理、のち本会顧問）、高倉新一郎（北大・農、同前）、林猛雄（北大・工）、岡崎由夫（学芸大鉄道）、また出版社所属、水産孵化試験場所属、所属のない市井人の名前も見え、まさに横断的であった。

以上のいきさつから、北海道地理学会は「札幌地理研究会」が直接の母体というわけでもなく（多くは本会に入会し、本会の運営の中心になつた）、新しく出発したといえよう。

## (2) 第1回総会（1950年12月7日）について

設立総会であるが研究発表も5つ行われ、来道された保柳睦美博士による「カナダとアメリカの地理教育について」と題する特別講演もあり、会誌No.1には「第1回総会」と記されるが、今日で言う大会であった。この総会で設立経過が報告され、会員名簿の配布、会則の制定と役員選挙があり、今日の本会にも繋がる事項が審議された。

第1回総会で、上記の「いきさつ」が報告されたとみられるが、設立趣意についても述べられたと思う。しかし報告の記録はないので、会誌No.1に北海道地理学会発起人による「はじめの希望」が掲載されており、今日でも含蓄ある箇所がみられるので抜粋する。

### はじめの希望

（前略）

これまでの地方地理学会は、ただ地理教育と受験準備に役立つ程度の目的しか達せられなかつたものが多い。地理学はその本質上、更に進んで政治的にも経済的にも人間の社会生活のすべての基礎にならねばならぬ。何をするにも地理的条件を考えないではできない。地理学研究の成果が、その方面に役立つよう、あらゆる施策にはまず地理学上の意見を求めてから、というようにならねばならぬ。

そのためには地理に篤学なるもの自らが、それに役立つような研究をせねばならぬ。

（中略）

北海道地理学会は、今生まれたばかりの赤ん坊であるから、すぐには役立たないかも知れんが、会員諸君の研究努力によって、順調に発育すれば、大きな結果が得られるであろう。そして、北海道地理学のためにもまた広く地理学界にも地理教育上にも貢献することになるであろう。

それを切に希望するものである。

（1950年 北海道地理学会発起人）

この趣意には、まさに創立五十周年記念事業のシンポジウム大会で議論されたことが述べられており、それはいま今日の地理学の課題としていることであり、“古きを尋ねて新しきを知る”思いである。また、はじめの方に「これまで……地理教育と受験準備に役立つ程度」とあるのは、地理教育を軽視しているのではなく、そのあとから最後まで読めば「地理研究に根ざした地理教育」を意味することがわかり、これもなお地理教育の今日的課題に触れていると言えよう。

総会では次の会則が定められた。

#### 北海道地理学会々則

(名称)

第1条 本会は北海道地理学会と称する。

(目的)

第2条 本会は地理学についての研究を目的とし、併せて地理教育にも資する。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

研究助成、研究発表、調査、講習講演、研究報告書刊行など。

(会員)

第4条 本会に入会するときは会員の紹介が必要である。

第5条 会員が退会するときはその旨を本会に通知すればよい。

(役員)

第6条 本会に次の役員を置く。会長（1名）、副会長（2名）、幹事（若干名）。

第7条 役員は会員の互選によって決定し、その任期は2年とする。

(会合)

第8条 総会は毎年1回開催し、役員の選出、予算決算の審議、その他の重要事項について審議する。

役員会の決議によって臨時総会を開くことができる。

第9条 役員会は必要に応じ隨時開催する。

(会費)

第10条 会員は会費年額200円を負担する。

(事務所)

第11条 本会の事務所は当分「北海道学芸大学地理学研究室」におく。

(支部)

第12条 本会は札幌、函館、旭川、釧路に支部をおく。

第13条 この会則の改正は総会の決議によって行うものとする。

附則 この会則は昭和25年12月1日から実施する。

基本的な事項は現行とあまり変わらず、相違点は、第4条に関して会員の紹介は要らず、年会費を添えて誰でも入会申込できること、第6条に関して評議員と監査が加わり評議員と幹事は会長の委嘱によること、第10条に関して会費年額により一般会員と学生会員に分けたこと、また新たな条文付加として、顧問をおくことができ幹事会の推薦で総会の承認を得ること、会計年度の規定くらいである。

現行にある評議員は現在、有名無実であるが加えられた経緯と時期については後述する。また、支部についても現在、会員名簿上はとくに区別されていないが、会員先達からは地方で学会や巡検を開催するときの窓口や世話役の意味合いがあると聞く。設立時の会員名簿を見ると、その区分けは札幌支部が石狩・空知・胆振・日高、函館支部が渡島・檜山・後志、旭川支部は上川・留萌・宗谷・網走、釧路支部は釧路・十勝・根室の各地方と推測される（会員のいらない地方もある）。

第1回総会で選ばれた役員は初代会長が森寿美衛、副会長が田中秀作と佐々保雄、幹事は札幌支部が柏村一郎、宮崎芳男、山崎長吉、井黒弥太郎、函館支部が亀谷栄、旭川支部は空席、釧路支部が棚瀬善

一である。以降、歴代の会長・副会長の三役についてのみ表1に示す（会報で幹事の記載がない号があるため）。

また、第1回幹事会が総会後1950年12月26日に開かれ、会の運営について次のことを審議している（抜粋）。

- ・会報の名称は「会報」、北海道地理学会、第〇号とする。財源が出来るまで謄写印刷とし、発行回数は年3回以上。会報は事務的報告にとどめ、論文、要旨、短報などは、別に研究報告書として年1回刊行。実費は各自負担。
- ・会費は年200円とし、……送金の都合のよいように振替貯金に入れる。年度は1月から12月までとし……
- ・1、2月は室内の研究とし、夏季はなるべく外で例会を開き、秋季には札幌以外の地で行う。……北海道総合開発、文部省科学研究費についても研究する。
- ・特別会員制は設けず、皆普通会員とする。現会員は、なるべく多数の新会員を紹介する……

実際は「会報」は事務的報告にとどめるのではなく、会員の研究、発表要旨、研究資料が掲載され、「研究報告書」は残っているものでは1篇があるが、これ以外見当たらず、その後やめたようである。個人負担の問題のほか、会報の発行で手一杯と判断されたためと思われる。会誌名は、1959年10月の「北海道地理」No.30となるまで「会報」北海道地理学会 No.29(1959年7月)まで29号発行された。

会計年度は、創立が1950年12月だったので、翌年1月からの年度になったが、1958年、会則改正で会則第14条を付け加え、4月から翌年3月までの年度となっている。

なお、幹事会とは幹事ばかりの集まりでなく、会長以下、役員の集まりを幹事会と初回から記載され、会則にある「役員会」とは呼んでいない。今日も役員会と呼ばず幹事会と呼ぶ由縁であるが、思うに幹事の役割が重要との姿勢の現れであろうか。

## 2. 学会の運営と活動の変遷

学会の歴史を活動と運営の特色からいくつ分けてみた。異論もあるかと思うが、全体を見渡して、学会初期活動期（1959年まで）、学会活動発展期（1985年まで）、学会活動成熟期（1999年まで）、学会活動新展望期（2000年～）の4つに分けてみようと思う。区切りの年は明確なものではなく、大体このあたりに過ぎない。最後は始まったばかりである。

### (1) 学会初期活動期の活動と運営（1959年まで）

この時期は、学会創設時の発起人メンバーが中心となり、会長を3期5年勤めた森寿美衛（3期目途次に逝去）のもとに協力・奮闘した時期で、その活動には驚くべきものがある。総会（その後の1964年度秋季から大会＝学術大会と呼称）と例会に分け、総会は年1回であるが、例会は平均年4回、当初の1951年は例会6回で、記録からも創立当初の意気込みが伝わる。

例会は研究発表、巡査、あるいは両方と柔軟に行われ、研究発表は総会時ととくに区別がなかったよ

表1 歴代の会長・副会長

在任年度	会長名	副会長1	副会長2
1950－1952	森 寿美衛	佐々 保雄	田中 秀作
1953－1954	森 寿美衛	佐々 保雄	宮崎 芳男
1955－1955	森 寿美衛	佐々 保雄	宮崎 芳男
1955－1956	宮崎 芳男	佐々 保雄	柏村 一郎
1957－1958	宮崎 芳男	柏村 一郎	奈良部 理
1959－1960	宮崎 芳男	柏村 一郎	奈良部 理
1961－1962	宮崎 芳男	奈良部 理	藤波 孝成
1963－1964	奈良部 理	筒浦 明	藤波 孝成
1965－1966	柏村 一郎	岡本 次郎	沼田 武
1967－1968	柏村 一郎	古川 史郎	内田 淳一
1969－1970	筒浦 明	瀬川 秀良	内田 淳一
1971－1972	岡本 次郎	瀬川 秀良	沼田 武
1973－1974	瀬川 秀良	内田 実	沼田 武
1975－1976	内田 実	山本 博信	関口 淩
1977－1978	柏村 一郎	小杉 健三	関口 淩
1979－1980	筒浦 明	藤島 篤孝	沼田 武
1981－1982	岡本 次郎	羽田野正隆	廣田 芳男
1983－1984	沼田 武	進藤 賢一	鴨志田 勇
1985－1986	沼田 武	野川 潔	高平 順夫
1987－1988	野川 潔	山下 克彦	高平 順夫
1989－1990	進藤 賢一	羽田野正隆	大森 好男
1991－1992	羽田野正隆	山下 克彦	山内 正明
1993－1994	山下 克彦	氷見山幸夫	林 隆治
1995－1996	奥平 忠志	佐々木 異	林 隆治
1997－1998	土井 時久	寺田 稔	三好 煉
1999－2000	佐々木 異	高橋 伸幸	山内 正明

うである。研究発表の多くは会報に掲載され、総索引にみられるように分野は多岐にわたるが、当初は学会創立の経緯もあり北海道の開発に関する研究がみられる。また森会長による会員の研究や地理学啓蒙に資する資料掲載（北海道に関する文献、北海道5万分の1地形図について、北海道の地名など）も特徴である。

巡検（表2を参照）は乗合バスと列車を中心の時代、野幌巡検（1951.4）、月寒巡検（1953.6例会）、星置扇状地巡検（1953.8例会）などの札幌市内・巡検のほか、岩見沢市のトラック提供によりトラック荷台に乗っての、幾春別川巡検（1951.11例会）、夕張市巡検（1952.12総会）など札幌市外での巡検も活発に行われている。

表2 本会巡検年表

年	月	会種	共 催 等	巡 檢 名: テ 一 マ
1951	6	例会3		野幌方面見学旅行
1951	11	例会5		幾春別地方の地質
1952	12	大 会		夕張市巡検
1953	6	例会13		月寒大地の土地利用と集落
1953	8	例会14		星置川扇状地と低湿原野・砂丘
1956	10	大 会		星置扇状地と手稻鉱山・発寒扇状地
1959	10	大 会		野幌・江別・角山方面の地理
1962	6	大 会		石狩川水害地域と新篠津開拓
1962	9	大 会		室蘭港と工業地帯
1963	10	大 会		旭川市周辺巡検
1964	10	大 会	日本地理学会	札幌市内巡検
1965	10	大 会	東北地理学会	函館市内巡検
1966	9	大 会		帶広巡検
1967	10	大 会		三笠・幌内炭坑・奔別炭坑の巡検
1968	10	大 会		小樽市内巡検（バス利用）
1969	10	大 会		千歳市内巡検（午前）
1970	10	大 会		釧路巡検：釧路市および周辺の自然と産業および港湾
1972	10	大 会		苫小牧港周辺および東部予定地区
1973	10	大 会		歌志内巡検：閉山に伴う鉱業都市の衰退と産炭地新興の現状について
1974	6	大 会		恵山巡検
1976	11	大 会	東北地理学会	早来巡検：火山地形、酪農、苫東開発地域の観察
1977	9	大 会		後志巡検：後志山地の自然と土地利用
1978	10	大 会		夕張巡検：夕張地区的石炭生産の歴史と産炭地の変容
1979	10	大 会		青函トンネル巡検：青函トンネルと函館圏
1981	9	大 会		占冠巡検：上川管内占冠村－石勝線開通に伴う地域の変容および振興計画・事業
1982	11	大 会		長沼巡検：長沼・由仁・栗山各町市街およびその周辺地域の産業
1983	9	大 会	東北地理学会	道南巡検：南北海道日本海岸の自然と人文
1984	10	大 会		旭川巡検；旭川市の地場産業
1985	9	大 会		小樽巡検：小樽市再発見－小樽市の潜在力を知る－
1986	9	大 会		札幌北郊巡検：札幌北郊と石狩町の変貌－紅葉山砂丘と大型住宅団地を訪ねて－
1987	10	大 会		三笠巡検：幾春別川流域の炭鉱地帯の地域変化
1988	10	大 会	札幌地理サークル	札幌南郊巡検：札幌市南郊の自然と人文－最近の変貌を探る－
1989	9	大 会	東北地理学会	札幌東南郊巡検：札幌東南郊の産業と開発
1990	9	大 会		大雪山巡検：大雪山の自然と観光開発
1991	10	大 会		江別巡検：近郊10万都市・江別市を探る
1992	9	大 会		余市～小樽巡検：後志北部沿岸地域（余市・仁木・赤井川・小樽）の地域産業
1993	9	大 会	札幌地理サークル	浦臼巡検：石狩川中・下流域における農村の変容
1994	9	大 会		苫小牧巡検：苫小牧地区の自然と産業
1995	10	大 会	東北地理学会	沙流川・鶴川巡検：沙流川、鶴川の中・下流域の自然と産業
1996	9	大 会		道南巡検：道南の歴史的風土
1997	9	大 会	札幌地理サークル	中空知旧産炭地巡検：中空知の旧産炭地域（砂川・上砂川・歌志内・赤平）の変容
1998	10	大 会		栗山巡検；栗山町の産業基盤と町づくり

講演は、渡部栄蔵氏（千歳町議長）：千歳町の町勢概要（1952.9例会）、有賀三男氏（北炭副所長）：炭鉱経営の状況（1952.12総会）など現地開催の関係者、富田芳郎氏：台湾の村落（1951.10総会）、淵一郎氏（北海道総合開発委員会）：北海道の鉱業開発（1953.2例会）、石川俊夫氏：北海道の火山（1953.4例会）、石塚喜明氏（北大農）：北海道の土壤・佐々保雄氏（北大理）：津軽海峡海底トンネル（各1954.12総会）など、著名な研究者と多彩な演題で、後の本会顧問・佐々保雄先生がすでに津軽海峡海底トンネルに関わっていたことも窺える。

これらの記録は、北海道地理 No.30（1959.10。ここから会誌名を「北海道地理」とする）まで、学会財政からの印刷費捻出は難しく、手製のガリ版刷りの会報に掲載された。会報 No.26までは森会長自らのガリ版執筆になるもので、細かい文字で、図、表も必要なものが掲載され、1951年は12号も発行され（ほとんどの毎月）、主要幹事（柏村、事務局の置かれる学大札幌分校に1951年着任の奈良部など）による会計、郵送などの手助けはあったものの、会の運営の指導、会誌の発行、その合間に資料の整理など、森会長の献身的な活動は大きかった。

しかし、森会長が1955—1956年度の会長に再々任直後の春から病に倒れて11月に逝去され、その損失は大きなものであった。会報 No.27（1958.11）の「会報」には、「1955年度は森会長、春以来の御病気、更に11月には御逝去という悲事のため遂に会報発行は勿論、総会さえも延期を余儀なくされ、会活動停頓の年であった。爾来、1958年迄会誌発行は停止され……」、「森会長の時には総会のほかに例会もありましたが、先生の病気以来とだえ御逝去後は辛うじて総会が開かれるのみであり、会員の会合の機会がなく、……通信費も不足で例会開催通知も出来ない事情から、一応全道対象の会はあきらめ、学大を中心に行なうことにした。これが地理懇話会の発足である。これは将来例会が行われるに至ればそれに切り替えられる性質を持たせている」とあり、指導者の突然の逝去により、運営もままならなかつた様子が窺える。しかし地理懇話会は毎月のように開催され、外国文献・日本文献、中央学界の話題、北海道の研究トピックの各紹介など、第1回（1957.11）から第10回（1958.5）まで続いた。

こうした努力で会は再び立ち上がりの方向に向かったが、森会長のもとでの猛烈な学会活動（佐々（後の顧問）、幹事の柏村、奈良部、沼田、井黒など）が本会の礎になったことは間違いないと思う。

## （2）学会活動発展期（1960年—1985年）

### a. 大会、例会について

この期は、初期活動期のように多数の例会はもたないものの、学会事務局の学大札幌分校地理学研究室に1958年に山本博信が教官として着任して事務局2人体制に戻ったこともあり、再び活動の歩みを進めた。この時期の特徴としては、道内の諸機関はもとより、他学会との共催、地方での積極的な大会開催、シンポジウムの開催など、対外的にもより広い活動が定着したことがある。それに伴って会員数の変化

（図1）にみるように、会員数も初期活動期（59名～88名）より毎年着実に増加し、1985年には、158名（顧問除く）とほぼ倍の規模になり、会員所在もこの期の最後には札幌など道央圏が6割と多いものの、全道各支庁に、また活動の幅を反映して東北、関東など道外にも見られるようになった。

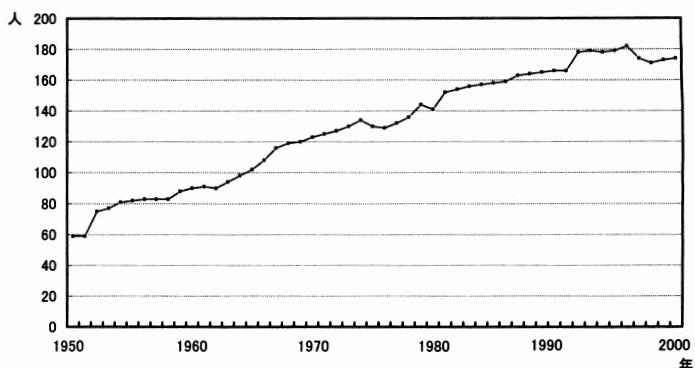


図1 本会会員数の推移

例会は、1961年2回、1966、1967、1979、1981、1985年各1回と減少したが、前半の1967年までは研究発表が主の例会であったが、1979年以降は会員以外の著名な方、とくに折から来道された先生による講演主体の例会になり、これはこの後、現在まで例会の「決まり」ではないが通例となっている。

その代わり、大会（1964年秋季から総会ではなく大会と呼んだようである）は、1959年度から春季大会、秋季大会の年2回になったことである。初めてのシンポジウム大会（宮崎芳男会長）が1959年秋季、「北海道における地域開発の問題点」と題して開かれた。これは、第1期北海道総合開発計画が一応終了した時点で、本会創立の経緯に関して、先述のように「北海道の開発、地理教育のためにもキチンとした研究組織」とあるため、本会としても点検する趣旨があったと思う。このシンポジウムは小シンポジウムで「まとめ」は会報にないが、奈良部理副会長の司会のもとに、以下の4つの報告について討論している。

沢田芳一：奥尻島における土壤侵蝕の実態、山本博信：奥尻島の経済構造における問題点、阪本宣史：苫小牧港建設の現状と発展過程、筒浦明：北海道開発の問題点。なお、このシンポジウムのあと、開発地巡査で陸上自衛隊の協力により、何と参加者40名が自衛隊大型ダンプカー3台の荷台に分乗し、新篠津村・北村の開拓地、石狩川水害地を回り、現地討議を行っている。

次は、1969年秋季（筒浦明会長）の「地方都市をめぐる地理学的諸問題」と題するシンポジウム（於：千歳市民会館）で、趣旨は当時第3期北海道総合開発計画の概要が示されたおり、全国的には巨大開発と広域生活都市圏が叫ばれ、この中でさらなる拡大が予想される札幌メガロポリス周辺の都市はどうなるか、周辺の工業開発はどうなるかといった点にあり、会誌No.44にシンポジウムまとめの記事がある。

翌（1970）年秋季（筒浦明会長）、後述の巡査も実施された「港湾都市を中心とする地理学的諸問題」と題するシンポジウム（釧路開催）が開かれ、港湾のもつターミナル機能は、商工業の流通、都市発達に重要な役割をもつものの、港湾の機能を中心に据えた都市計画は明治以来わが国ではなく、港湾をもつ都市も他都市との競合関係により発展・衰退の岐路が分かれるので、港湾機能と都市機能の関係を押えて都市計画に反映させることが重要、との趣旨で、基調報告は奥平忠志「港湾都市を中心とする地理学的諸問題」、釧路市役所の企画開発担当者を交えて討議された。まとめは会誌No.46に掲載されている。

1983年春季（岡本次郎会長）は「北海道産業の諸問題」と題するシンポジウムを開催、テーマは広い視座で北海道産業を捉えること、各研究者の分野が網羅できること、会員の積極的な参加が期待されることから選ばれた。次の報告にまつわり、討論が行われた。羽田野正隆：就業人口からみた北海道の産業特性、宮永千春：北海道における地場産業の育成の一実態－富良野市におけるワイン事業について－、山下克彦：地域経済の視点からみた農業－根釧地区を事例として－、原田実：北海道の機械工業の特性と振興課題。報告内容と討論のまとめは会誌No.58に掲載されている。

これらのシンポジウムは少なからず、地方自治体関係者にも本会会員のその後の研究にも有益なものであったみられるが、現在の時点でみれば広く社会に認識される手段として新聞、テレビ等を通じての敷衍も考えられるところである。

#### b. 巡査の実施と他学会等との共催について

他学会との共催以外の通常の大会は、春季大会は研究発表・講演・総会、秋季大会は午前に研究発表、午後に巡査のパターン多いが、巡査のみの秋季大会が1973、1976、1981、1982、1984年と、後年に頻度が増す。秋季大会、とくに札幌以外での開催の場合は、午後の巡査のみでは十分観察できない、そのため1980年代に入ると他学会共催以外でも貸切バスにより、ある箇所は時間をかけ、ある場合は広く多くの箇所を巡査することが多くなった。宿泊を伴えば研究発表も巡査も時間的に可能になるが、他学会と共に共催以外は参加人数の規模から一般には困難であったためと思われる。しかし、1970年秋季には、シンポジウム大会（テーマ「地方都市をめぐる地理学的諸問題について」）が釧路で開催、巡査ガイドブックも印刷されて巡査実施、また1980年春季には稚内で研究発表、巡査がいずれも宿泊1泊で開催され、これは当時の筒浦会長のもと、釧路市、稚内市の大きな協力を得て実施されたものであった。

他学会との共催は、1964年秋季が最初でそれも日本地理学会との共催であった。奈良部会長のもとで、共催は研究発表会場の準備もさることながら、巡査の企画・実施（案内）も共催学会から財政的補助があるほかは全面的に本会が実施することであった。日本地理学会は規模も大きく、当時の会報からは本会員以外、発表会場137名（会場：北大）、巡査74名（札幌市内および近郊巡査、バス2台）の参加があり、その準備は大変なものであったと思う。以後、本会と日本地理学会との共催はなく、日本地理学会が北海道で開催する場合は、北海道の日本地理学会評議員を通じての単独開催となっている。翌1965年秋季（柏村会長）は東北地理学会との共催になり、これは、1977、1983年、……というように東北地理学会が東北6県で秋季大会を回った後、北海道地理学会との共催依頼があり、本会も引き受けて現在に至っている。隣接する地方学会というつながりの意味が大きいと思う。

#### c. 印象深い巡査

巡査（表2）はどれも意義深いものであるが、この期で時宜を得たもの、減多に機会がないもの、ユニークなものということで筆者の個人的な思い出も含め3点を挙げたい。

時宜を得た点では、1981年秋季（岡本会長）の占冠巡査で、おりから10月1日に開通したわずか1週間後の石勝線に乗り、占冠村市街とトマム地区を巡査したことである。現在のように国道274号線もまだなく、石勝線開通前は国道237号線を鶴川沿い北上、または南富良野から南下するしかなく、占冠村は道央からみれば遠い地であった。石勝線開通で札幌からわずか1時間40分で占冠駅に着く。岡本会長の人力により、占冠村によりトマム地区の観光開発（スキー場、キャンプ場、総合レジャーランド）より説明があり、マイクロバスの提供によりトマム地区、山菜加工施設、椎茸栽培施設、ニニウの観光資源（峡谷の奇岩）を見学。トマム地区は1974年に筆者が地形調査したおり、出作の草地と農家廃屋が2、3軒あり、調査の1日、誰にも会わないところであった。

減多に機会のないものは、1979年秋季（筒浦会長）の青函トンネル巡査であろう。青函トンネルが開通すれば、函館圏は、北海道はどうなるかの視座もあった。本会顧問で鉄建公団の青函トンネル地質顧問として工事を指導されていた佐々保雄先生の便宜によるもので、6年前の大出水を克服し、1980年の作業坑・先進導坑の本州側との接続直前の時期、吉岡の坑口から軌道車に乗り、先進導坑先端切羽を見学。坑口付近はすでに本坑が掘られ綺麗にセメントで覆われていた。先進導坑により軟弱な岩盤をコンクリート・ミルク注入で固めてしまえば大型掘削機が投入でき、本坑は比較的の短期間に通ずることで、本坑や先進導坑を掘る大型回転羽の掘削機が強く印象に残る。日本のトンネル掘削技術の最先端をまさに見たわけである。本坑が本州側と繋がったのは1986年、津軽海峡線がオープンしたのは1988年であった。

ユニークな巡査として1982年秋季（岡本会長）の長沼巡査を挙げる。長沼町から栗山町へ行き、栗山町からまた長沼町に戻るコースはすべて徒歩で、近年、交通機関や貸切バスを使用する巡査が多くなり、往復約14キロの巡査は、歩く巡査の原点でユニークであった。栗山町の開拓にまつわる「泉記念館」、栗山町市街・商店街を見学し、復路は皆でカップ酒を飲みながらの、のどかな巡査であった。

#### d. 会誌の体裁（号数と年は索引参照）

会誌「北海道地理」No.30まで学会初期活動期に引き続く手製のガリ版刷りであった。が、この号から表紙に掲載タイトルの目次が付くようになり、会誌No.36まで続く。この後は目次は表紙奥付に掲載され、表紙は誌名、号数、発行年月、発行団体のみ記され、あとは真っ白のスタイルになり、これは会誌No.71まで続く。なぜ、このようなスタイルにしたのか、当時の故奈良部元会長・故山本博信会員（事務局）に聞けない今、本当のところは把握していない。しかし、簡潔な真っ白な表紙に大きく「北海道地理」と印刷されるスタイルは独特で、探すとき一目でわかった。会誌No.31から印刷業者に発注。しかし会誌No.36まではタイプ謄写印刷（五木房印刷所）で、これはタイプを原紙に当てるもので、仕組みはガリ版印刷と変わらず、図表の挿入が印刷所発注のため初期の手製（苦労は多大）より大きく制限された。ほとんど文章のみの会誌が多く、図表が頼りの地理学では心もとなかった。会誌No.37からNo.48までは

活版印刷で(白楊印刷, 楓印刷, 藤田印刷と変遷), 図表がようやくほぼ自由に掲載できるようになったが, あまり鮮明ではなかった。会誌 No.49より電算写植印刷(高速印刷センター)になり, 字体も図表も鮮明, 学術刊行物に手慣れた印刷所のためもあり, 中身の体裁は一新, 基本的に現在まで続く。会誌 No.1からみると予算と印刷技術の変遷である。

本誌に論文, 短報(研究ノート), 紹介, 紀行, 解説など, 掲載種別が目次に明記されるのは会誌 No.43からである。なお, 会誌 No.40に簡単な投稿規定が載るが, 詳細なものは会誌 No.59からである。ここに査読制に関する記載として, 「原稿の内容によっては, 著者の承諾を得て原稿の種別を変更することがある」とあり, 査読の文字はないので査読制をとっているとはいえないが, 識者に読んでもらい, 著者に直してもらうことは行われ, 質の高い雑誌にしようとしていた。

### (3) 学会活動成熟期(1999年まで), 学会活動新展望期(2000年~)

この期は展望期も含め, 近年のことであり, 簡潔に記述する。

#### a. 大会, 例会について

学会成熟期の特色は, 一口にいって1つは研究内容や研究の交流において国際的になったことである。総索引にもみられるように堀淳一によるアイスランド, スイスなどの紀行の紹介, 今井敏信によるニュージーランドやカナダの農業的土地利用の研究を初めとして, 後期には渡辺悌二らによるネパール・ヒマラヤの自然環境的研究など枚挙にいとまがない。また, 大会での講演に来日中の外国の研究者をしばしば招いて交流も深めている。例会はこの期, 1995年1回のみであったがイスラエルのY.グラダス教授を招いての講演(乾燥地域における開発と砂漠化)で, これらは, 岡本元会長・山下元会長・進藤元会長, 羽田野元会長など, 国際的な視野に立つ研究を進めていたこと, 若手研究者も海外に出かけての調査研究の機会が増えたことがあると思う。わが国も国際化が叫ばれ始めた時期であり, またバブル経済でドル安になり, 海外渡航がしやすいことも研究を助長した。

もう1つは, 国際化の影響もあるかもしれないが, 研究分野が多彩であり, しかも学際的になり, 内容も深化したことが挙げられると思う。これは岡本元会長, 氷見山元副会長による電算機を利用した土地利用の研究, 岩崎一孝による電算機利用の気候研究, 橋本雄一による同, 都市地理の研究があり, また大丸裕武による札幌扇状地の構造的・気候環境的形成過程の研究, 鈴木正章による, 火山灰年代学を沖積平野構造の解明に結びつけた研究などが挙げられると思う。その他のテーマによるものも紙数の都合で挙げられないが, 全体として学会に発表された研究, 学会誌に掲載された内容は, 国際的な視野も含めて深化, ここではつまり成熟してきたともいえる。

しかし, もう1つ, 本会には重要な柱がある。それは地理教育であり, 本会設立時より柱の1つにしてきた。総索引でもわかるように, 地理教育に関する研究報告は少ないわけではないが, 分野地理研究に比べればやはり少ない。このためもあり, 1986年春季(沼田武会長), 「地理教育」と題するシンポジウムが開催された。大学, 高校, 中学校, 小学校, 各現場での地理教育の問題と課題が報告, 討論された。これは, 詳細に会誌 No.61に掲載されている。

会員の変化(図1)をみると, この期, 159名(1986年)から, ピークの182名(1996年), 174名(2000年)とほぼ高レベルに推移しているが, 会員構成の動向としては, 教育現場の多忙さから小・中・高の若手教員の入会が少なくなってきており, かつて学会初期活動期から学会活動発展期前半に学会でも地理教育初め中心的に活躍した会員が定年, 高齢化などで退会が続き, 地理教育の点では危惧されるところである。会員数が近年も維持されているのは, 大学院生など若手研究者の入会増加による。

次に, 学会新展望期については, 今記念号に掲載の創立五十周年記念シンポジウム「北海道における環境と開発—地理学が果たしえる役割と今後の展望—」は, こうした本会の足跡を辿り, いかに地理学が社会に役立つか, いかに地理教育がこれらの成果と方法を取り入れながらも大学・高校, 中学校, 小学校の教育に役立たせることができるか, それには本会の成果を知らしめるという点もあり, 必然的

に出てきた課題と展望と思う。

b. 巡検について

学会活動成熟期は、春季が研究発表・記念講演、秋季が巡検中心と、よりパターン化され、表2にみるよう、東北地理学会との共催以外は、遠隔地での開催は少なくなっている。特筆されるのは、1990年秋季（進藤会長）の大雪山巡検で、北海道教育大学自然教育施設を利用しての大雪山巡検で、山岳登山巡検は本会で最初のものと思う。参加者が協力しての宿泊先での自炊もユニークであった。

巡検地についても過去の古い時期の地を再びみるものが多く、これはこれで地域変貌をみる点で有意義であるが、何か巡検についても新機軸（例：じっくりみて討論をより深化する）が模索されている。

c. 会誌体裁について

学会活動成熟期の会誌の特徴として、1つは会誌No.69から投稿規定において、「論文、研究ノート、展望、解説、資料、紹介については査読者を選定し、査読者の意見を参考に原稿の種別と採否を検討する。内容によっては、図表を含め修正・書き直しを、査読者の意見を参考に編集委員会が投稿者に依頼し、その結果により再検討する」と査読制を明記したことで、名実ともに査読制になったこと。2つ目は、会誌No.60より、裏表紙に英文表紙（掲載タイトル目次）を掲載したこと、3つ目に会誌No.72より表紙デザインを一新したことがある。表紙デザインは一般会員にもデザインの募集を会告等と一緒に募集したが応募がなく、幹事会で各自デザインを持ち寄ることになり、橋本雄一によるものが北海道をイメージした雪の結晶を思わせるデザインで、しかも洗練、すっきりしたもので幹事会全員一致で採用されたものである。中身の体裁（表紙、裏表紙の奥付掲載内容など）はまだ検討の余地があるが、学術誌らしくなってきたことは確かである。

関連して、本会会則について、初めの方に本会創立時の会則は現在とあまり変わらないことを述べたが、50年を経て現在の時点でさらに改良できるところはないか、とくに評議員制（現会則第7条、会長の委嘱）が実質とられていないこと（唯一、1975年期の内田会長のおり7名の評議員が委嘱された）を、評議員、支部制（会則第13条）など現在の本会の規模、運営の実態からどう考えるか、それと編集委員会など実質委員会と名乗っているものに委員会の規定がなく、これら委員会の規定を細則を設けて定めるか、など課題もあり、幹事会で検討されている。

注

- 1) 故筒浦明元会長は、戦後まもなく「札幌地理研究会」（のちに「札幌自然地理セミナー・札幌人文地理セミナー」の2つの会、さらに「札幌地理セミナー」に改称）を創設したが、これとは名称が同じであるが別である。

(大内 定 記)